

刊夕日八十二月二



定額 一ヶ月金五拾五圓 郵費五圓
 廣告料 五拾五圓 行金五拾圓
 日曜祭日の翌日休刊
 發行所 常磐毎日新聞社
 電話 六二〇
 印刷所 常磐毎日印刷株式會社

常磐炭田の開発と

片寄平藏 [七]

山口彌一郎

一、洋銀壹萬七千枚
 内三千枚 五月廿四日納 三千枚
 廿四日納 三千枚
 五月廿八日納 三千枚
 六月三日納 三千枚
 六月七日納 三千枚
 六月十五日納 三千枚
 六月廿三日納 三千枚
 六月廿七日納 三千枚
 六月三十日納 三千枚
 右之通御引替可被下様奉願候以上
 申二月十二日
 牧野越中守
 鈴木又左衛門
 飯野 辰三
 銀座御役所
 一、洋銀貳百枚 二月十日納
 二月十二日
 一、洋銀七千五百枚 富田屋太郎右門殿願分
 内譯
 貳千五百枚 八月一日納
 貳千五百枚 八月十日納
 貳千五百枚 八月十二日納
 申二月廿日願
 銀座御役所
 一、洋銀壹萬貳千枚

内譯
 貳千枚 九月十二日納
 同 九月十七日納
 同 九月廿三日納
 同 九月廿八日納
 同 十月四日納
 同 十月十日納
 申二月廿八日
 内藤勝之丞様内
 杉山 文司様
 瀬川安右衛門様
 高 治 助 様
 銀座御役所
 尙は申は萬延元年で當年八月に平藤氏は江戸に於て死去するので全く最終の大取引の一斑を窺ひ得るものである。彼の諸用留には種々の雜記事があるが或る頁に次の如き面白い記事を見得る。
 イギリス
 アメリカ
 1 テン
 2 ナイン
 3 エイト
 4 セブンス
 5 ハイス
 6 ホウ
 7 ツイレ
 8 ヨウ
 9 ウ
 10 ワン
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

之れに依つて商接外國取引の苦心がしのげられ、外國貿易の恩人としても平藏氏に感謝せざるを得ない。
 正式に幕府より外國貿易の許可のあつたのは安政六年二月で高島嘉右衛門氏等に親み明石屋次右衛門氏と共に開港の事にも與り、平藏氏、外國奉行所、請ひ相州神奈川五丁目目石炭販賣所を設けし石炭交易の端を開いたに依り、通稱石炭屋と名づけられた。
 尙は彼れは石炭のみならず、易を以、満足せず外國交易品一手販賣問屋を設け當時各地より産する絹糸茶紙の類まで其便に依り其賣買には皆な運上を納めた。現在の海關税の如きものである。斯て平藏氏は横濱に次男半左衛門を置き江戸に明石屋次右衛門を中心として取引し白水には高崎今送を以て採炭の棟梁たらしめ自身は絶えず此間を往來して事業を整頓し盛大に向つた。
 5 軍艦納炭
 幕府上納の石炭は凡ら軍艦の燃料に使用されたものゝ如く左に軍艦操練所の役中に提出した賣上高受取證を掲げてみる。
 覺
 石炭千九百俵
 一、金五兩貳分七朱 横濱迄積戻運賃

銀七分五厘 百斤ニ付三分之割
 一、錢拾八貫百六拾四文
 此金貳兩二分 石炭千九百俵 錢百四文 横濱波渡場迄下ケ賃八文上ケ賃八文 百斤拾六分之二割 二口金八兩三分 錢百四十七文
 右之石炭積戻入用金御下ケ被成下置難有奉存候以上
 安政七年正月
 奥州岩城郡大森村
 平 藏
 御軍艦操練所
 御役人中様

一冊の代金で御希望通りな五冊の雜誌が自由に讀める川崎巡文庫
 (申込次第規則書進呈) 電六三〇番
 耳鼻咽喉科専門 大和田醫院
 平町南町 電一七〇番

かまぼこ製造
 水産法
 平町一丁目
 お惣菜用 さつま揚 吉原場
 電話一四一番

高久病院
 院長 醫學士 高久 忠
 副院長 新潟醫學士 赤羽 清
 藥局長 藥劑師 佐竹 菊雄
 平町田町 電話五二三番
 内科小兒科 外科花柳病科 耳鼻咽喉科 レントゲン科

全勝日活超作豪壯篇 大河内傳次郎主演
 丹下左膳
 オールトーキー
 第一篇 全十三卷
 舊正月十五日ヨリ 八日間
 毎日晝夜二回
 晝午前十一時ヨリ 夜午後六時ヨリ
 掛持出張上映
 舊正月 十五ヨリ 磐城座
 十六ヨリ 海盛座
 十八ヨリ 綴劇座
 二十ヨリ 豐盛座
 載連聞新賣讀・聞新日日京東
 監督 輔大藤伊 原作 忘不林

魚清食堂部
 電話六三三番
 徒弟さん二、三名入用
 希望者は至急御来店あれ……
 委細面談優遇す。
 平警察署通り

新車御披露
 三十四年式「デラックス、セダン」入車
 致しました。貸切の御用の節は是非御試乗を御願ひ致します。
 最新型セダン揃ました
 電話六四〇番
 尼子タクシー

願書の洪水

襲來前の一瞬時

磐中、磐女、平商共に
今の處は申込僅か
係員も顔負け

既報する四日より新學年の生徒募集を開始した磐中、磐女の申込み者は目下の處磐中二名磐女七名で十九日より募集開始した平商は未だ一人の申込み者もないといふ例年にならぬ非常時？ぶりに折角準備整へて手具懸引いて待ちかまえてゐる係員も此の處些か顔負けの態であるが愈々時日切迫と共に願書の洪水が襲來する

巡回視察

東白川青年等
東白川郡竹貫村青年團員廿餘名は本郡の農家經營視察の爲め廿八日自動車で植田町に入り來月二日迄郡下各町村を巡回する豫定である

脱税狩り

十餘件を摘發

平縣稅務出張所では一昨年來滯納整理に追はれ勝ちであつたが今年納付成績が、近來に良く好であつたのでこれを機會にかねてよりの噂に基き過般斷然脱税狩りを行つたところ、こゝ、數年間堂々店舗を構へながら營業申告をなさず

るといふ嚴罰方針を以て臨む事になつた、尙ほ近く湯本、植田、四倉等にも出張脱稅者には容赦なく處分する筈

小學校長協議

事項決定

故意に脱税を圖つてゐる者が多く自轉車修繕業、表具師、菓子販賣業等十餘件の脱稅者を發見取敢へすこれらに對しては營業開始當時にさかのぼつて課稅

既報來る三月二日午前十時より平第一小學校に於て開催される郡下各小學校長會の協議事項は左の如くである

ると

- 一、會長選舉に關する件
- 二、皇太子殿下御誕生奉祝記念事業に關する件
- 三、教員思想取締に關する件
- 四、實業教育振興に關する件
- 五、全國小學校教員精神作興大會出席に關する件
- 六、青年訓練所縣聯合大會參加に關する件
- 七、福島縣青年會館建設

溜池干上る

草野村で大騒ぎ

草野村消防組では昨午晴天續きのため各所の溜池涸渇し殊に今年度は小川江の改修工事で通水なきを見越し萬全を期し、過般來組合總出動で各所に貯水池を掘り萬一に備へてゐる

兵事々務

十六日檢閲

石城郡下各町村役場兵事係の召集並に徵發事務檢閲は來月十六日午前九時より平署午後一時より平町役場會議室で行はれる檢閲官未定

三人制卓球

縣下大會開く

平町マルトモ運動具部主催の縣下三人制卓球大會は平卓球會後援の下に三月十八日午前九時から平第三小學校に開催される

小名濱收入役

小名濱町では二十七日午後一時

無盡調査

掛金額五千圓

寄附金に關する件
八、諸會費未納整理の件

平町役場では市内の頼母子講無盡の調査を行つたが現金無盡が二、洋服、箆筒、吳服等の無盡が各一の計五で昨年度の掛金總額千六百廿八圓であると

第一校學藝會

盛況裡に終了

既報昨日午前九時より第三學年以下の學藝會を催した平第一小學校では本日午前九時より第四學年以上の學藝會を催し午前十一時閉會したが觀覽者は昨日に劣らぬ満員で頗る盛會を呈した因に二日間の觀覽者は五百七十四名

教練講習出席

平青年訓練所では來る三月十九日より二日間郡山市第三小學校に於て教練指導の講習會が開かれるので目下出席者を詮衡中である

大浦豫算總會 大浦村では三月二日午後一時から豫算村會を招集する

種牝馬の補助

石城郡産馬蓄産組合では二十八日付で郡下優良種牝馬四十頭に對し種牝馬設置補助金各百五十圓宛交付せられた旨申請した

平町映街
二十八日：
△平館 ◎ユ社連
續活劇全發聲「猛獸王國」第四週
◎「活現代劇」山本嘉次郎監督 高津愛子 瀨良章太郎主演
「戀愛非常時」◎ユナイテッド極彩色漫畫 ウォルト・ディズニー製作「ノアの方船」◎日活全發聲 伊藤大輔監督 大河内傳次郎 山本禮三郎 澤村國太郎主演
「丹下左膳」第一篇

一日：
△世界館 ◎松竹京都 秋山耕作監督 坂東好太郎 飯塚敏子主演「一心太助」
◎松竹蒲田 五所半之助監督 伏見信子 竹内良一主演「十九の春」◎寛壽郎プロ 寛壽郎 淡路千代子主演「積の霧」

看護婦急派

の求めに應じます

平町南町

看護婦會

今流行のレコード

- 東京音頭
 - 昭和音頭
 - 福島音頭
 - 萬歳音頭
 - スキー行進曲
 - 希望の首途
 - 春のエレチー
 - 急げ幌馬車
 - コロンビヤ
- 其 他 各 種 新 譜
何卒御用命は 電話 一五九番へ

金光堂時計店

貸切の御川命は!!!

獅子吼(四四九ノ勢)デ
マツサキ
眞先ニ.....(マツサキ)

三九二タクシーへ!!!

學校卒業賞品特賣

各學年卒業修業期が近づきました。各種賞品類も全部荷揃致しました御仕入の絶好期、卸賣特に御務め勉強致します

共榮漆器店

景品賞品類
進物贈答品
恩賜賞品
記念表彰品
各國産漆器

本任尋卒 仕着 小使月二圓
同高小卒 仕着 小使月二圓
外交員十八九才より二十才迄

平町三丁目北裏通り

電車と自動車 正面激突

運轉手即死、助手重傷

上京の小名濱トラツク椿事

小名濱町字米野九五平野直
康方自動車運轉手小林善吉
(三)は昨廿七日午前五時半
頃福島千六百三號のトラツ
クに助手平野康太郎(三)を
同乗

運轉して 上京淺草橋
停留所附近を進行中前方よ
り疾走し来た東京市電錦糸
堀出張所の竹田二郎吉(三)
の運轉する一六二七号電車
と正面衝突し

自動車は 轉覆し小林
運轉手はその下敷となつて
即死、助手は頭部脳部等に
重傷を負ふたと

焼芋屋の

竈から出火

一戸烏有に

内郷村大字宮字峯根六五燒
芋屋齊藤安一郎方より昨廿
七日午後十時十分頃發火し
火は忽ち同家を包み隣家に
燃焼せんとした處を同村消
防組及び平町より應援に駆
け付けた自動車御筒等が消
火に盡力同十一時同家一戸
を全焼して鎮火したが原因
は燒芋竈の不始末からであ
ると損害三白圓

見るも悲惨

残る二屍体發掘

磐炭早くも慰藉方法協議

未だ二名の死体を残す磐炭
高坂坑の大落盤は其の後炭
礦側が全力を挙げ

係員必死

の發掘作業
を續けた結果今二十八日午
前八時に新潟市蒲原町生れ
探炭夫本間平治(三)の屍体
を發掘次いで同十時に至り
内郷村御厩探炭夫齊藤正義
(三)の屍体が炭塊のため
滅茶々に粉砕され

見る者をして眠をそむけさ
す凄惨な形態を呈して發掘
されこれを以つて磐炭大落
盤による貴き犠牲者は全部
發掘されたわけである、尙
磐炭當局ではこれら
犠牲者の遺族に對し
十二分の慰藉をなし又華社
葬として合同葬儀を執行す
べく、葬儀日取慰藉方法等
協議中である

通行中の

婦人轢かる

方角轉換の際に

江名町字北町佐藤文次郎方
トラツク運轉手 志賀義元
(三)は二十七日午前九時頃平
町五丁目山野邊藥局前に方
向轉換の際通過させた大工町
橋本ツル(三)を誤つて引倒
し左足に全治三週間を要す
る傷害を與へた

薩摩守に

懲役言渡

既報双葉郡熊町村大字小入
野字赤野谷地當時住居不定
無職吉田幸作(三)に對する
自動車只乗り逃走事件の判
決言渡し公判は本日午前十
一時より平區裁判所に於て
中島判事係り三堀檢事立會
の下に開廷されたが判事よ
り求刑通り懲役八ヶ月を言
渡された

無免許二百貫

内郷
村大字小島字新町居住朝鮮
人山本清治事崔河泊(三)は
昨年九月以來無免許で好間
内郷方面から銅鐵村等三百
貫時價百圓を買入れ他に轉
賣して居た事發覺する廿六
日平署に檢舉された

明日の天気
今晩は南西の風
明日は西北風の
天候よし

今晚の部
後六、〇 子供の時間
管絃樂 獨唱古筆愛子
東京ラヂオオーケストラ
指揮篠原正雄
後六、五 基礎佛語講座
十三 日黒三郎

嫉妬の一家皆殺し

愈よ第一回公判

三月十七日平支部に

既報好間村大字上好間小川
五郎氏方居住茨城縣生れ坑
寺門次郎(三)が昨年十二
月十六日午前十一時頃内縁
の妻遠藤ミヨに情夫が出来
たものと誤解しグイナマイ
ト三本に点火し妻の一家を
應殺せんとした殺人未遂及
び爆発物取締、銃砲火藥類
取締法違反事件は去る十七
日豫審終決有罪と決定され
たが第一回公判は来る三月
十七日午前九時より平支部
に於て中島判事係り關口
香西兩判事陪席三堀檢事立
會、門傳辯護士列席の下に
開廷されると

好間虎眼檢診

好間

村では來月五日同村役場内
で全村民のトラホーム檢診
を執行する

教育振興座談

第三

區平、内郷、好間、平窪、
赤井、小川、飯野、川前、

ス 氣象通報 番川報告
明日の部
前七、〇〇 基礎獨語講座
(二十一) 橋本忠夫
前九、〇〇 滿洲より郊祭
御模樣新東京大廣場より
中繼
後七、三〇 婦人講座
後八、〇〇 三陸震災追憶
の夕
管絃樂 二、挨拶 宮
城縣知事赤木朝治 三、座
談會 四、管絃樂 仙臺管
絃樂團
後九、三〇 時報 ニュー

二十九日午後十時頃泥酔
の上同村馬上金彌と爭論の
末酒壺を以て同人を毆打左
頭部に全治約三週間を要す
る傷害を與へ罰金二十圓
△内郷村大字綴字秋山藤葉
自動車店方運轉手石山七郎
(三)は倉田定之助を同乗茨
城縣川尻町附近を疾走中注
意を怠り全治約一ヶ月の負
傷せしめ業務上運失傷害罪
として罰金四十圓に本日各
平區裁判所に於て略式命令
を以て處分された

平職業紹介所報告
回人を求める方
△女中 二十三、十五才
尋卒 チップ制
△女中 二十才以上 尋卒
外面談
回職を求める方
△商店員 二十七才 尋卒
給料面談
△土工夫 三十八才 尋卒
給料面談
△トラツク助手 二十三才
尋卒 外面談
△商店員 二十才 高卒
給料面談

小商店員數名募集
年齢十五才ヨリ
優遇
御希望の方午後一時
ヨリ本人御來談下さい
平町田町一七
レストランサロン
電話三五二番

市原醫院
電話一四番

内科 小兒科 花柳病科
藤沼醫院
入院應需

町屋七
紺五
町電話
平電



【禁無斷轉載上演映畫】

寶井馬琴演
山本英春畫

第六十八回 徳川家に崇る村正

二手に分れて見行

鈴木重太郎、入谷の鐵五郎の處へやつて来た、ガラッと格子を開けて

重「御免よ、鐵五郎は居るか」
店にゐた子分が「オヤこれ誰かと思つたら、鈴木重太郎、ヘイヘイ鐵五郎親分は居りましてございませう」

重「そうか、ちや上げてもらはう」
奥へ取次ぐ、鐵五郎とび出して来て

鐵「且那よく入らつしやいました、さあどうぞ此方から」

奥の座敷へ案内する鐵五郎の女房が、茶、煙草盆などを持つて来て挨拶をする

鐵「今日は何か且那御用の事です」
重「ウム、一寸お前に頼みたい事があつて来た」

鐵「あ、そうですか、ちや且那が御用があるといふから皆彼方へ行つて、女房を初め他の者を遠ざけて鐵「且那例の一件は何か手掛りがありましたか」
重「いやそれに就いて来たのだが、實は今日仲町、既雨に會つてな」

鐵「そう、酷い降りでしたな、さぞお困りでしたらうどうなさいました」
重「ふと傍を見ると軒の長い格子作りの小粋な家がわつた、その軒下で雨止み待つてゐる、出窓の障子を開けてかほを出した女

した」
鐵「おや、危ねえ、拙者もこれは險呑だ殊によつたら美人局ではなからうか、油断は出来ないと思つてゐる處へ、二人連れ、武士が這入つて来た、その一人が女の且那だといふが、一寸立退を失つて拙者も困つたな」
鐵「なるほどね、それからどうしました」
武士の厭味、女の大胆な物語り、あつた事を語り



がそこでは濡れるから此方へ入れといふ、一旦は辭退をしたが女中に言ひ付けて格子まで開けさせてくれる實際しづきも掛るので遠慮なしに中へ入ると今度は上へ上れといふ、斷り切れなくなつて上へ上ると酒を出

女に關係をつけたりなどしちやあ、お前さんその女に惚れたんでせう」
重「いやそんなことちやない、その武士二人のかほを見ると、驚かしたのは毎日拙者がこんなをして探し廻つてゐる五人組の土藏破り

の内の二人だ」
鐵「エイッ」
重「まだ土藏破りと判然決つた譯ではないが、葛西太郎で見掛けた五人の内の二人の武士、奴等の素性を洗つて見度い」
鐵「まあとんだ好い拾ひ物をしましたね」
重「拙者が今日世話になつて禮へ行つて女の口裏を探つて見るも一計かと考へたが先方疑をかけても相成らんから、この上はお前に助力を頼むより他ないと思つて參つた」

鐵「それは仰言る通りで腰に傷持ち彼等は些とも油断をしませんから、氣取られませんでした日には何にもなりません、且那はもう近付かねえ方が宜いでせう」
重「何分頼む」
重太郎は萬事を鐵五郎に頼んで立ち戻る、後で鐵五郎は一子分の三吉を初め腕のたしかな者はかり五六人選んで仲町の妻の家、廻りを張り込ませた、思ひ、に姿を變え、中には紙屑拾ひ乞食にまで姿をやつす者もある、御用聞の仕事も却々大變なものだ、彼れ是れ夜の四ツ半頃、泥酔をした二人が妾の家を出る、門口まで送り出した女が

女「ちや且那お氣を付けてゐらつしやい、あなた又どうぞ御出で下さいませ、今日はとんだ失禮を致しました」
○「イヤ大きにお邪魔を致した、御免」
ヒョロ／＼しながら二人

連は雷門の方へ行く、これを見計つて三吉と友藏といふ男が尾けて行くと、前の二人連れは四邊構はぬ高聲で冗談言ひながら行く所は別段怪しくも見えない、馬道の角迄行くと若い方の男

○「イヤ大きにお邪魔を致した御免」と言ふと
○「まあ好いではないか今晩は拙者の家へ泊つて行きなされ」
○「イヤ實は彼女が待つて居るでな」
○「彼女と申すは」
○「ハテ察しの悪い、吉原の女だ」
○「相變らず御熱心なこと

○「ハ、ア御同様女にはあまい」
○「マア宜い、行かつしやい」
○「然らば御免」
武士が左右に別れたから三吉、友藏も相談の上三吉が妾の且那といふ年上の武士の方を尾けて行く。

急告

元弊店員郡信次 昭和八年五月廿三日解雇仕候當時著しく停滯せる債權の督促のみを命じ置きしを幸とし取引先各位に對し無權限の文書を發し御迷惑を懸け居る哉に聞及候就ては右様の事實有之候はゞ御手数數年左記へ來る三月五日迄に御申出下され度御願ひ申上候
二月二十三日
茨城縣下館町
セキアキラ
關彰商店本店
平四倉 支店
土浦關本

父龜吉儀永々病氣の處藥石効なく二月二十三日午後九時四十分死去仕り候間此段反御通知候
追而來ル三月二日午後一時自宅出棺九品寺ニ於テ埋葬可仕候
昭和九年二月廿八日
福島縣平町一丁目
施主 松本元三郎
松本重兵衛
半谷專松
親戚一同

ほしやなぎ
いかの鹽から
鱈魚の子
魚問屋
店理代平命生本日大最優最
榮盛賀志
(三一電)目丁四平